

『大隈重信関係文書』編纂の経緯と成果

高橋 央

はじめに

早稲田大学大学史資料センター規程第二条には、センターの事業目的として、「センターは、本大学の歴史、創設者大隈重信および関係者の業績を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて、本大学の発展に資することを目的とする」とある。一九九七年の『早稲田大学百年史』完結を受けて、一九九八年、『早稲田大学百年史』の編集を担った早稲田大学大学史資料センターが早稲田大学大学史資料センターに発展改組された。新設のセンターが担う大隈研究の重要事業として企画されたのが、早稲田大学大学史資料センターを編者とする、『大隈重信関係文書』の刊行であった。本事業は後述のように二〇〇四年一〇月の第一巻刊行開始から、年一巻の刊行ペースを維持し、二〇一五年三月の第一一巻刊行を以て完結した。七〇〇〇通を超える大隈重信宛の膨大な書翰を一〇年強の

時間をかけて翻刻・年代推定し、刊行するという事業であった。ここでは本事業の経緯と成果、また課題について、概況を報告したい。

一 編纂の経緯

早稲田大学史資料センター編『大隈重信関係文書』（みすず書房刊^①）の編纂は、早稲田大学創立一二五周年記念の中心事業の一つとして、全一〇巻・別巻一の予定で、二〇〇四年一〇月の第一巻刊行を以て開始された。以降年一巻の刊行ペースを維持し、二〇一五年三月、分量超過等の事情で別巻から変更した第一巻の刊行を以て編纂事業が完結した^②。

全一巻に約七四〇〇通にわたる大隈重信宛和文書翰（日本人発信書翰）を収録した。第一巻から第一巻前半にわたる本編、また第一巻中に設けた補遺編には、早稲田大学図書館、早稲田大学史資料センター、佐賀市大隈記念館が所蔵する書翰を収録した。さらに第一巻後半に追補編を設け、右記機関以外の所蔵書翰、個人所蔵書翰を収録した。収録順序は書翰発信人の氏名の五〇音順とし、同一人物からの書翰は年代考証の上、年代の古いものから順番に配列して収録した。

編纂事業については、若干の紆余曲折はあったが、基本的に編纂委員会が編纂の大綱決定と事業の推進にあたり、その下に設けられた編集委員会が編集を担当した。実際の編集実務は、各巻ごと、書翰の差出人別の担当者が翻刻と年代推定における不明点や問題の検討にあたった。難読な文字がある場合と、年代推定に複数の可能性が残る場合と、困難な場合等は、編集委員会の議論により翻刻文字・年代を確定した。

膨大な書翰を一字一字丁寧に翻刻し、さらに個々の書翰の年代を正確に推定することは、想像以上に困難な作業であった。解読困難な文字も多く、年代を推定する際も、抽象的な内容の書翰に関しては推定が困難であり、各担当者は一日に何度も早稲田大学中央図書館に足を運び、年代推定の素材の調査・収集に追われた。国会図書館や国立公文書館等、都内の図書館・公文書館から、時には佐賀にも足を延ばして各担当者は調査に従事した。最大の助けとなったのは、近年充実著しい各種データベース・システムの発達である。明治・大正期の公文書や新聞記事、雑誌記事等にしながらにして容易にアクセスできるようになり、その活用なくしてこの事業の完結は困難であった。厳密な翻刻と年代推定を志向した結果、校正は一卷につき多い時で五、六回を重ねる事もあり、みずず書房、また印刷担当の理想社の多大な御理解と御協力で本事業は完結できたと言える。深甚の謝意を表したい。

二 編纂の成果と課題

『大隈重信関係文書』全一一巻の刊行により、現在原史料が確認できる大隈重信宛書翰の大部分が翻刻され、研究利用の利便性が格段に増した。従来研究活用されてきた日本史籍協会編『大隈重信関係文書』全六巻（一九三二—一九三五年）は、史料の価値が高い書翰を採録したものであり、「明治一四年の政変」までの時期の書翰を中心に収録している。今回の『大隈重信関係文書』は、現在原本が確認できる大隈重信宛書翰の大部分、慶応年間から大正中期に至る時期までの約七四〇〇通を網羅的に収録・翻刻した。今回の刊行により大隈重信を中心とした膨大な人的ネットワークの実情があらためて明らかになり、大隈重信研究のみならず、近代日本研究の再考にも貢献しうると考えられる。

一例として鍋島直彬の大隈重信宛書翰を一通取り上げてみよう。鍋島直彬は佐賀藩の三支藩の一つである肥前鹿島藩の藩主で、明治維新後は侍従・初代沖繩県令・元老院議員・貴族院子爵議員等を歴任した人物である。今回の『大隈重信関係文書』には、第八巻と第一一巻にそれぞれ二二四通と二〇七通、計四三一通という膨大な書翰が収録されており、同一人物からの書翰数としては群を抜いている。年代が判明した書翰のみを見ても、明治六年から大正四年のものまで、約四〇年にわたる時期の書翰がある。この事実からも、大隈が明治維新後も鍋島直彬のような旧主鍋島家の人々と緊密な関係にあった事があらためてわかる。内容も鹿島鍋島家の養子縁組や婚姻にかかわるものから、政治的な書翰まで多岐にわたっており、公私ともに親密である事がわかる。

ここに取り上げるのは第八巻収録の、一八九八（明治三二）年七月一五日付の大隈重信宛鍋島直彬書翰である。この書翰で鍋島は、第一次内閣組閣直後の大隈に対しこう述べている。

今後は益御心配之事と存候。呉々も十分内部の情弊を洗滌し、而して従来の悪風を改め天下の耳目を一新し、立憲政治の美を視し人心をして悦服せしめるの果敢あらんこと直彬の切望する所なり。随て民党及正義者の常に切論止まざりし事件にして、是まで政府に於て放擲顧みざりしもの、如きは着々挙行有之度候³

当時鍋島は貴族院の子爵議員であった。鍋島と大隈が個人的に親しかったという点に留意する必要があるが、このように政党内閣としての第一次大隈内閣に期待する声は貴族院議員の中にもあった事は注目に値しよう。従来の第一次大隈内閣研究でも、大隈に期待する貴族院議員の存在と動向については、管見の限り必ずしも研究が深化していない⁴。さらにこの膨大な大隈宛鍋島直彬書翰により、改めて大隈と鍋島家の人々との親密な関係性もわかる。大隈と鍋島家の人々とのネットワーク、そしてそれが大隈の諸活動に与えた影響というのも、これからの大隈研究における重要な研究課題であろう。このような『大隈重信関係文書』所収の鍋島直彬書翰は、従来の研究状況に一石を投じるも

のとして期待できる。もちろんこれは一例であり、『大隈重信関係文書』に収録された膨大な書翰群は、日本近代史の政治史、経済史、教育史の分野等様々な分野の問題意識から、多様な活用が可能であろう。幅広い研究利用が待たれるところである。

課題もいくつかある。今回の『大隈重信関係文書』全一一巻に収録されたのは、前述のように、現在原本が確認できる、大隈重信宛の和文（日本人発信）書翰であり、外国人から大隈重信に宛てられた外国語書翰は収録していない（別紙等を除く）。早稲田大学図書館所蔵の「大隈文書」には多くの大隈宛外国語（外国人発信）書翰があり、長年駐日公使を歴任したハリー・S・パークスの書翰や、外務省・蕃地事務局の御雇外国人であり、大隈の個人アドヴァイザーもつとめたアメリカ人ルジャンドル（リゼンドル）の書翰等、貴重なものが少なくない。今回の事業では、大隈宛書翰の別紙として付随すると考えられる書翰を除き、これらの外国語書翰の翻刻までは行わなかったが、これらの書翰の翻刻も、今後の大隈重信研究の重要な課題の一つとして想定できよう。

また大隈が諸所へ出したであろう大隈発信書翰については、その全体像や実情は、ほとんど未調査・未解明である。今回収録した膨大な大隈宛書翰の量から考えても、また大隈が「字を書かない」人物であった点を考慮するとしても、相応に対応する大隈重信発信書翰（周知のように大隈の直筆はほとんどなく、他者の口述筆記か代筆、或いは印刷文である事が大半である）があった可能性があり、少しずつでも大隈発信書翰を調査収集することとその実情解明は、大隈重信研究の重要な課題であろう。今回の『大隈重信関係文書』に収録された大隈宛書翰に対応する、大隈発信書翰の調査収集と公開により、大隈をめぐる多様な活動の実態や影響がより明確になると考えられるからである。

『大隈重信関係文書』の書翰収録方法にも課題はある。収録書翰の配列を発信人氏名の五〇音順としたが、発信人順だけでなく書翰の年月日順に再配列することにより、新たな知見が得られると考えられる。大隈がどの時期にどの

ような人物たちから書翰を受信していたかが判明すれば、大隈の活動の実像がより鮮明になると考えられるからである。この年月日順書翰リストの作成と公開も、今後の重要な課題であろう。

おわりに

刊行事業が一段落して思うことは、快く資料の翻刻掲載を許可くださった関係機関・各位の御好意と、みずず書房と理想社の各位の御努力により、無事本事業が完結の運びに至ったことである。改めて深甚の謝意を申し上げたい。私事であるが数年前に助手を拜命し、『大隈重信関係文書』の編集担当となった時、膨大な量の大隈宛書翰の翻刻と年代推定をしなければならぬことに正直呆然とした事を覚えている。それでも翻刻や年代推定に苦慮しつつ、年代不明の書翰の年代推定が上手くゆき、編集委員間にも同意をいただいた時、何か自分が史料に生命の息吹を与えたかのような、喜びに近い感情を覚えたことは今も記憶に新しい。『大隈重信関係文書』全一一巻が、関係者各位の苦闘と努力の成果であることは確かである。後は江湖の幅広い利用と活用、また厳しい叱正により、大隈重信研究や早稲田大学史研究のみならず、近代日本の研究状況全般に資することを切望してやまない。

註

(1) 以下特に編者を記さない限り、『大隈重信関係文書』と略記する。

(2) 紙媒体の刊行事業。二〇一二年度より電子書籍としての配信も開始。二〇一四年度までに第一〇巻までの配信が完

了。二〇一五年度中に第一二巻を配信予定。

(3) 『大隈重信関係文書』第八巻、二七七頁。

(4) 大隈重信と鍋島直彬の第一次大隈内閣期の協力について

は、拙稿「大隈重信と鍋島直彬」『早稲田大学史記要』第四十六巻、二〇一五年二月を参照。